

道有林におけるハマキガ類を主とする害虫の発生状況 (1983 年)

鈴木重孝 東浦康友

トドマツを加害するハマキガ類の発生状況を、6月中旬に旭川 79 林班(1935 年植栽)、滝川 36 林班(1929 年植栽)、同 41 林班(1960 年植栽)の3か所で調べた。調査結果を表に示した。

ハマキガ全体の数は昨年にくらべるとほぼ4倍になった。コスジオビハマキの場合(図-1)、旭川では前年と同じ密度、滝川の2調査地では少し増加したが、全体としては低密度を保っている。トウヒオオハマキは旭川で増加している。タテスジハマキ類とトドマツチビハマキはいずれの調査地でも増加し、モミアトキハマキ類とトドマツメムシガも増加傾向を示している。以上のように、1983 年は幼虫越冬、卵越冬のハマキガとも昨年にくらべて増加したのが大きな特徴である。とりわけトドマツメムシガは、滝川 41 林班で再び大きく増加し、1977 年以上の密度に達した(図-2)。このトドマツメムシガは 20~30 年生のトドマツ造林地において比較的短い周期で発生をくりかえす種で、今後も各地で被害が散見されるだろう。

また 1981 年に初めて和寒で発生がみられたコメツガクチブサガ(スガ科)は、本年は上川、留萌管内から空知南部までの広い範囲で発生した。発生3年目となる和寒では、被害がほとんど目立たなくなり、発生が終息したのに対し、当別では今年はじめて被害が発見された。発生の中心は北から南へ移っているようで、図-3に示した固定調査地での結果も、旭川では減少

1982 年と 1983 年のハマキガ類の数 (6 月調査)

種 調 査 地	名 地	コ	ト	タ	モ	ト	ト	ト	そ	ハ マ キ ガ 類 合 計
		ス ジ オ ビ ハ マ キ	ウ ヒ オ オ ハ マ キ	テ ス ジ ハ マ キ 類	ミ ア ト キ ハ マ キ 類	ド マ ツ ア ミ メ ハ マ キ	ド マ ツ メ ム シ ガ	ド マ ツ チ ビ ハ マ キ	の 他 の ハ マ キ ガ	
旭川経営区 79 林班	1982 年	0.10	0.63	0.18	0.15	0.33	0.48	0.13	0.08	2.08
	1983 年	0.10	2.00	1.15	0.15	0.43	3.88	0.90	0.03	8.64
滝川経営区 36 林班	1982 年	0.71	0.04	0.04	0.32	0.21	0.96	0.50	0	2.78
	1983 年	1.30	0.50	0.80	3.20	0.70	0.90	3.40	0	10.80
滝川経営区 41 林班	1982 年	0.33	0.03	0	0.25	2.48	7.30	0.30	0	10.69
	1983 年	0.93	0	0.33	3.48	1.35	33.58	2.85	0.08	42.60

注：数値は 50cm の枝 1 本当たりの個体数

しているのに対し、滝川では増加していて、この傾向を裏づけている。したがって、空知管内ではさらに1～2年連続した被害がみられるだろう。

このほかトドマツの重要害虫であるツガカレハは、昨年すこし増加の兆しをみせていたが、今年はそれほど密度が増加しなかった。

カラマツ害虫では、カラマツハラアカハバチが依然として発生し続け、発生面積も2,800haとなっている。また、ミスジツマキリエダシャクは、美瑛のほか東神楽、旭川でも発生がみられ、早来でも発生を確認した。美瑛の調査例では、激害の場合、発生2年目で半分の枯死木が出たので、警戒すべき害虫であろう。風雪害跡地のカラマツヤツバキクイの発生は、関係者が被害木整理を早期に行い、防除に努めたことによって、ほとんどなかった。

(昆虫野兎鼠科)

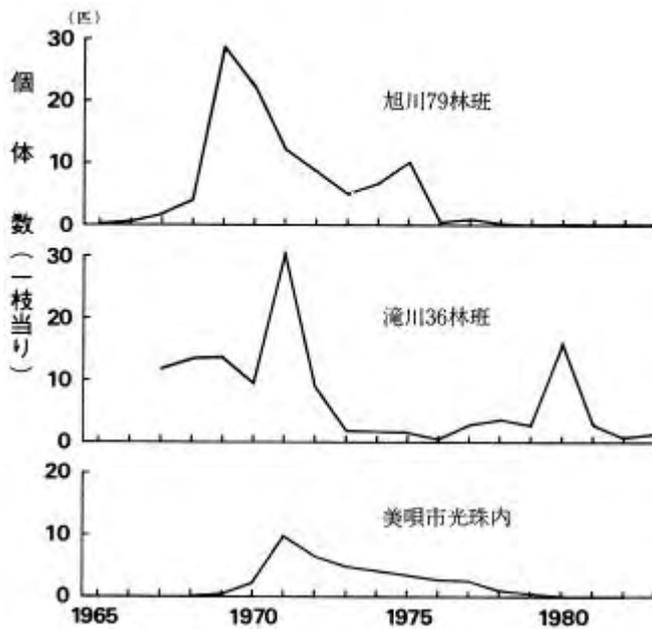


図 - 1 コソジオビハマキの個体数の年変動

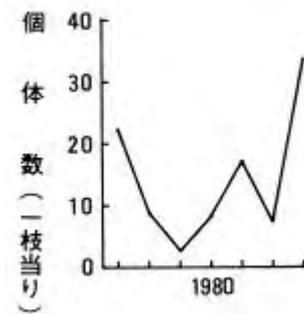


図 - 2 トドマツムシガの個体数の年変動

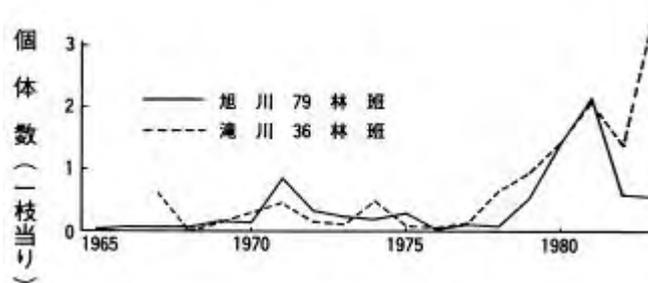


図 - 3 コメツガクチブサガの個体数の年変動